「生きる力」を育む中学校技術・家庭（家庭分野）の授業開発

－IB 認定校での授業実践と意識調査－

学籍番号　209326
氏名　松崎　弘太
主指導教員　中田　忍

1. 背景および目的

新学習指導要領では、生きる力を「知・徳・体のバランスのとれた力のこと」と表現している。「知」は「確かな学力」を指し、「徳」は、「豊かな人間性」、そして「体」は、「健康・体力」を指す。本研究においては、生きる力を育む家庭科の授業開発を目的とし、「生きる力」を「学校で学んだことを生活に活かし、行動する力」と定義づける。技術・家庭科（家庭分野）は生活に密着した教科である。調理技術や衣服の管理方法、どのように住みどのような家庭を築いていくのかという将来設計等、生きていく上で必要不可欠となる力を授業の中で育むことを目標としている。「自分が良ければ」という考えではなく、地域のため、国のため、そして世界のために自分には何ができるのかということを考えさせる必要がある。「SDG s ～持続可能な開発目標～」の視点を取り入れ、世界規模の災害や様々な問題への対策を立てて、現在・未来において住みやすい世界にするため、子ども達に、私たち一人ひとりに何ができるのかといった事を考えさせ、実生活の中で行動する授業開発を行うことを目的とする。そして、今後さらに生活様式が変わっても変化に対応できる力を子どもたちに身に付けさせることも本研究の目的とする。

2. 研究方法

2.1　質問紙調査による生徒の実態把握

まず、生徒の実態調査を行うことにより、授業前の意識調査を行った。調査は、技術・家庭科（家庭分野）の学習の必要性・性別役割分業に対する意識、衣生活・食生活・住生活・

SDG s（持続可能な開発目標）に対する意識と行動等に関する質問項目を作成し、対象生徒協力の下、授業初回時に、質問紙調査を実施した。その中に自由記述欄を設けて、技術・家庭科（家庭分野）に対する率直な意見も調査した。

2.2　授業開発と実践前後の生徒への意識調査

授業開発においては、実習校の IB スタイルでの目指すべき目標に向けた日々の活動と「生きる力」を育む授業をどのように関連付けるのかを考慮して、授業開発を行った。また、SDG s（持続可能な開発目標）の視点を取り入れ、世界規模の環境問題や様々な問題への対策を立てて、現在・未来において住みやすい世界にするため、私たち一人ひとりに何ができるのかといった事を考えさせ、行動する授業開発を行い、実践した。

生徒の授業を通しての意識を確認するために、授業終了後に質問紙調査、授業開始前質問紙調査、および最終回授業時から一定期間経過後に再度質問紙調査を実施した。各題材（私たちの食生活、私たちの衣生活・住生活）の授業初回時と最終回時に質問紙調査を行い、授業を受けて生活に対する意識がどのように変化したかを調査した。また、授業終了から一定期間経過した後に、同じ対象者に再度意識調査を行い、授業実践直後の意識が維持されている、もしくは変化しているかについても検討した。

3. 結果と考察

「私たちの食生活」において、『料理は女性が行うことだ』と考える生徒の割合は、最終回授業時では 23.5%であり、最終回授業時から一定期間後においては 17.6%となり、最終回授業時から一定期間後において、性別役割分業やジェンダー意識を持つ生徒の割合が減少したことが明らかとなったことから、「食生活」に対する意識は最終回授業時から一定期間経過後においても維持されていることが明らかとなった。しかし、実際に「食生活」に関する行動を実践している生徒は一定数減少した。「私たちの衣生活」において、初回授業時の調査では、『不要になった衣服を捨てる事についてどのように思いますか』に対して「もったいない」と回答した生徒は 54.3%であったが、最終回授業時の調査では 80%となり、最終回授業時から一定期間後の調査においては、82.4%となったことからも、SDG s やエシカル消費に関する内容や、不要になった衣服を捨てることに対する意識に関する内容では、最終回授業時から一定期間後においても、学習内容の維持が見られた。「私たちの住生活」においても「衣生活」と同様に、最終回授業時の調査と最終回授業時から一定期間後の調査とで大きな変化が見られなかったことから、学習内容の維持が見られた。一定期間後においても、複数の質問項目の結果から学習した内容を生活の中で実践する生徒が存在することから、授業を通して「生きる力」を育むことができたと推察される。